29　　の真の姿　　　　　　　　　　　　　敬語で人物関係を把握する

昔、唐に宝志和尚といふ聖あり。Ⅰいみじく貴くおはしければ、帝、「かの聖の姿を影に書きとらアん」とて、絵師三人を遣はして、「もし一人しては、書き違ふる事もあり」とて、三人して面々に写すイべき由仰せ含められて、遣はさウせ給ふに、三人の絵師、聖のもとへ参りて、かく宣旨をＡ蒙りてＢまうでたる由申しければ、「しばし」と言ひて、法服の装束して出であひ給へるを、三人の絵師、並びて筆を下さんとするに、聖、「しばらく。我がまことの影あり。それを見て書き写すべし」とありければ、聖の御顔を見れば、大指の爪にて額の皮をさし切りて、左右へ引き退けてあるより、金色の菩薩の顔をさし出でたり。一人の絵師は十一面観音と見る。一人の絵師は聖観音とⅡ拝み奉りける。おのおの見るままに写し奉りて、Ｃ持て参りたりければ、帝、驚き給ひて、別の使ひをやらせ給ひて問はせＤ給ふに、かい消つやうにして失せ給ひぬ。

それよりぞ「ただ人にてはおはせざりエけり」と申しあへりける。

【本文チェック】

①　ア～エの助動詞の、文法的意味を〔　〕に書きなさい。

ア〔　　　　　　〕　イ〔　　　　　　〕

ウ〔　　　　　　〕　エ〔　　　　　　〕

②傍線部Ａ～Ｄの敬語の敬意の対象は、ア宝志和尚（聖）・イ帝・ウ絵師たち・エ別の使いのどれか。それぞれ（　）に記号で書きなさい。

Ａ（　　　　　）　Ｂ（　　　　　）

Ｃ（　　　　　）　Ｄ（　　　　　）

③二重傍線部Ⅰ・Ⅱを現代語訳し、右の（　）に書きなさい。

Ⅰ（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

Ⅱ（　　　　　　　　　　　　　　　　　）

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　す〔３〕　　（　　　　　　）

２　まうづ〔４〕　　 ①（　　　　　　）

②参詣する

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　、よしあるの所なり。　（平家物語）

ア　面影　　イ　長所

ウ　風情　　エ　違和感

（　　　）

２　をきて、「くらもちのおはしたり」と告ぐ。（竹取物語）

ア　おられ　　　　　イ　お出かけになっ

ウ　お呼びになっ　　エ　いらっしゃっ

（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の傍線部の敬語の種類を後から選び、誰から誰に対する敬意かを答えよ。

（が作者に）「一夜の（作者が生昌をやり込めた）門の事、中納言に語り①はべりしかば、いみじう感じ申されて、『いかでさるべからむをりに心のどかに対面して申し②うけたまはらむ』となむ③申されつる」とて、またもなし。（枕草子）

ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

①（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

②（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

③（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

問４　次の傍線部の敬語の種類を後から選び、誰から誰に対する敬意かを答えよ。

　（中宮は）白き押したたみて、（作者に）「これにただいまおぼえむ古きこと一つずつ書け」と①仰せａらるる。外にゐたまへｂる（大納言）に、「これはいかが」と②申せば、「う書きて③まゐらせ ④たまへ。をのこは加へ⑤さぶらふべきにもあらず」とて、さし入れたまへり。　（枕草子）

ア　尊敬語　　イ　謙譲語　　ウ　丁寧語

①（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

②（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

③（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

④（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

⑤（　　　　・　　　　　から　　　　　へ）

問５　問４の文中の助動詞ａ・ｂの文法的意味を答えよ。

ａ（　　　　　　）　　ｂ（　　　　　　）

【探究】表現してみよう

問６　聖はなぜ菩薩であることを明かしたのだろうか。正体を明かす必要があったのだろうか。本文に情報が少ないこの点について、自分なりの推察を述べてみよう。

〔

〕

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝意志　イ＝命令　ウ＝尊敬　エ＝詠嘆

②　Ａ＝イ　Ｂ＝ア　Ｃ＝イ　Ｄ＝イ

③　Ⅰ＝たいそう尊くいらっしゃったので　Ⅱ＝拝み申し上げた

問１　１＝おっしゃる　２＝参上する

問２　１＝ウ　２＝エ

問３　①＝ウ・生昌・作者　②＝イ・中納言・作者

　　　③＝イ・生昌・作者

問４　①＝ア・作者・中宮　　②＝イ・作者・大納言

　　　③＝イ・大納言・中宮　④＝ア・大納言・作者

　　　⑤＝ウ・大納言・作者

問５　ａ＝尊敬　ｂ＝存続

問６　観点　「写させる以上、偽の姿を写すのは正しいことではないと考えた」「一つの同じような姿を描かれてしまうのは、仏の本質に合わないと考えた」など、文章の流れに適した推察になっていること。「和尚の姿に飽きた」や「驚かせてやろう」といった解釈は、文章全体の流れから適当でない。

【現代語訳】

問２　１　木立は、風情のある様子の場所である。

２　門を叩いて、「くらもちの皇子がいらっしゃった」と告げる。

問３　　（生昌が作者に）「先夜の門のことを、中納言に話しましたところ、たいへん感心し申し上げなさって、『どうにかして適当な機会にゆったりとお目にかかってお話を申し上げたり承ったりしたいものだ』と申しておられた」と言って、ほかには何のこともない。

問４　　（中宮様は）白い色紙を押し畳んで、（作者に）「これにたった今頭に浮かんでくる古歌を一つずつ書け」とおっしゃる。外に座っていらっしゃる大納言殿に、「これはどう（いたしましょうか）」と申し上げると、「早く書いて差し上げなさい。男子は口出しをしますべきでもありません」と言って、（色紙を御簾の中に）差し入れてお返しになった。